

視覚障害を持つ学生に対する TOEIC 対策

福田 泰久

はじめに

2020 年度前期はコロナ禍により遠隔授業を余儀なくされた。初めての事態に戸惑うなか、筆者の担当する 1 年生を対象とした必修科目の英語 I を、視覚障害を持つ学生が受講することとなった。本学では視覚障害の学生の受け入れは初めてであり、授業のコロナ対応の混乱も相まって、当初まなびネットへの誘導が上手くいかず、当該学生に不安を与えてしまったことをまずは反省しなければならない。その上で、本稿は英語 I の単位認定の要件となっている TOEIC 対策を、視覚障害を持つ学生に行う際の課題、並びに TOEIC IP テスト受験の顛末を記すことで、今後の提言とすることを目的とする。

1. TOEIC 対策

本年度の英語 I はテキストを使用せず、自作プリント（小テスト含む）と ALC NetAcademy NEXT の「TOEIC(R) L&R テスト 500 点突破コース」を併用し、動画・音声等を用いないオンデマンド型で行なった。教務課からの事前の情報では文字拡大による対応で問題ないとのことだったため、音声読み上げソフト等の利用も念頭に、まなびネット上にアップロードする資料は全てテキストファイルとした。

市販のテキストを用いなかった理由にはもう一つ、フォントとフォントサイズの問題がある。例えばリーディングセクションのパート 7 にはお知らせ、広告、契約書、E メール等様々な内容形式の長文が登場するが、問題によってゴシック体やポップ体等使用されているフォントがまちまちで、Century や Times New Roman のようなひげ飾りのついたセリフフォントが用いられることもある上、解答に直結しない文字装飾が施されていることも多い。加

えて、本文に比べて各問題の見出し等には大きなフォントサイズが使用されることが一般的である。そこで解答の妨げとならないよう、自作することでフォントを UD (ユニバーサルデザイン) フォントに統一し、拡大した際に画面に投影される文字が同倍率になるよう、文字をすべて同じフォントサイズとした。

対面授業であれば練習のため解答をマークシートで行わせる(障害のある学生には丸やチェックをさせる)場合もあるが、今年度は遠隔授業のため、学生には選択肢で解答させる形に揃えた。この辺りは TOEIC のプライオリティサポート¹ に示されている配慮を踏まえたものである。対面であれ遠隔であれ、拡大読書器を使用する場合机上の紙数は最小限にすべきであるし、なにより、マークシートを塗りつぶすという行為は視覚障害のある学生には困難を伴う。対面授業の場合は問題用紙に印刷されている選択肢に直接丸やチェックをさせる等により、拡大読書器に問題用紙と解答用紙を入れ替える手間を省くことが重要であろう。この度の遠隔授業では、ダウンロードした課題のワードファイルに直接解答を入力、あるいは選択肢の網掛け・ハイライト、その他のいずれかをもっとも解答のしやすい方法を当該学生に選ばせた。

ALC NetAcademy NEXT について、当該学生への聞き取りでは大きな支障なく解答できたようだ。ただし、細かい仕様に対して問題も見られた。例えば、「〇〇点突破」を謳う 3 コースにはフルサイズとハーフサイズの模擬試験が用意されている。デフォルトの設定では、模擬試験を開くと全画面表示の状態ページが開き、タッチスクリーン等によってページを拡大することができない。タッチスクリーンによる拡大や、ズーム機能による拡大は Esc キーで全画面表示を解除した後であれば可能なのだが、PC 操作に慣れていないと戸惑うのではないかとと思われる。この点は事前に教員がページにアクセスし操作に習熟しておく必要があるだろう。

一方で、視覚障害を持つ学生にとって取り組みやすい点も見られた。模擬試験のパート 7 は左画面に本文、右画面に設問が配されている。一般的な紙媒体のテキストでは本文の後に設問が印字されるため、太田も指摘するところだが、拡大読書機等を用いると 1 頁あたりの文字数が必然的に少なくなることで視線の移動が頻繁に生じ、本文と設問を行き来する中でどこを読んで

いるのかわからなくなることもある(72)。その点、左右に配置されることで負担が幾分軽減されるのではないだろうか。

とはいえ、こうした負担の軽減も遠隔授業によって相殺されてしまったようだ。2020年7月に実施された、江島他による本学学生への遠隔教育の実態把握のためのアンケート調査(対象人数4,046名、回答者数1,108名)では、Q12「困っていること」として、課題が多い(780名)と答えた学生が7割に上っている。実際、当該学生も当初は期日(月曜日の授業日に対して課題提出の締め切りを日曜日に設定)までに提出できていた課題が次第に時間を要するようになり、連休明けの5月下旬には、なんでも相談室を介して時間的猶予のお願いが入った。まなびネットの課題の仕様では「開始日時」と「終了日時」が全受講生に一律に示されるため、別途、当該学生にはメールにて締め切りの延長を提示していたのだが、課題の総量は変わらない為、結局締め切りが後ろ倒しになるだけだったのだろう。非常に意欲的な学生であるため安易に課題量を減らすことは避けたかった(し、恐らくそれは行き過ぎた合理的配慮というまた別の問題を引き起こす)のだが、毎回の課題を受講生一律にせず、すべての視覚障害者に当てはまる訳ではないだろうが、斉藤も指摘するように、「視覚障害を持つ学習者は語彙や文法もリスニングを通して覚えることに秀でて」(42)いるため、回によって当該学生の取り組みやすい音声重視の課題を選ぶ等、工夫が必要だったかも知れない。

2. TOEIC IP テスト

本学の英語IはTOEIC IPテストで350点以上取得することを単位認定の要件としている。例年7月初旬に学内で試験を実施するのだが、本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から学内での団体受験は見送られ、TOEIC Program IPテスト(オンライン)²とALC NetAcademyの模擬試験の受験によって読み替えることとなった。

残念ながら環境が整わなかったため、当該学生はオンラインのTOEIC IPテストを受験できず、TOEIC公式HP内にあるポッドキャスト³を用いたリスニング能力のテストによって単位認定した。オンラインのIPテストは2020年4月に始まったばかりのサービスであるため環境の不備はやむを得

ないとしても、ペーパーによる IP テストの障害者対応の遅れを考えると、今後オンラインでどのような配慮が為されるのか、そもそも技術的に可能なのかどうか不透明である。そのため以下では、従来のペーパーによる IP テストでの配慮の在り方を、本人からの聞き取りと大学共通テスト（センター試験）の配慮例を踏まえて検討したい。

聴覚障害を持つ受験生に対して、リスニングは別室待機とし、リーディングから受験を認めていた本学のこれまでの対応から、視覚障害を持つ受験生に対しては、その逆に、リスニングの得点のみで全得点を読み替える措置がまずは考えられる（ただし、公式テストでは現状リスニングセクションのみの受験はできないようである）。⁴ 大学共通テストでは、点字教育を受けている者で点字解答する場合に 1.5 倍、弱視等の受験者でマークシートではなく文字解答する場合に 1.3 倍ないし時間延長なしの措置が採られている。リスニングでも同様に 1.5 倍ないし 1.3 倍の時間延長が認められるのに加えて、音声の連続方式と音止め方式の 2 種類が用意されている。⁵ 問題用紙に印刷されている図や絵を読むため時間延長が必要な当該学生は、音止め方式でリスニングを受験したようだ。音止め方式とは解答中に一度音声を止め、解答が済んだ段階で次の問題の音声を再び流す配慮のことだが、これは当該学生も指摘するように場合によっては視覚障害を持つ受験者に有利に働くこともある。合理的配慮の線引きの妥当性が問われるところだが、個々の見え方にばらつきがある以上、やむを得ない措置であろう。

一方で、リスニングとリーディングの両方を 1.3 倍なり 1.5 倍にして受験させる措置も考えられる。ただし、上で指摘したリーディングのパート 7 については、問題用紙の紙面構成を ALC NetAcadmy に揃えることは困難であろう。そこで、大学共通テストで行われているような問題冊子を 2 冊配布する配慮が望ましいのではないだろうか。上でも述べたが、問題本文と設問が物理的に離れている場合、拡大読書器を使用して解答することには困難を伴う。その為、本文を読むための冊子と設問を読むための冊子の 2 冊を用意し、折り目をつける等⁶ の目印を作ることで解答を比較的容易に行うことができるだろう。

3. 次年度以降の TOEIC 指導

齊藤は視覚・聴覚障害者だけでなく、視覚的学習あるいは聴覚的学習の得意な健常者を含めた、誰もが取り組むことのできるバリアフリー英語教材のモデルを提示している。とりわけ「自然なテキストをそのまま用いて、分析的 (analytic) な方法で、文法を習得しながら読解力をつけることを目指す」

(44) 教材作成にあたり、留意すべき点を次の 3 点にまとめている。1. 読み上げソフトを使用する場合、その機械的で不自然な読み上げが問題となるため、目標言語である英語についてはネイティブスピーカー（に準じたスピーカー）による読み上げをナチュラルスピードとスロースピードの 2 種類用意しておく。2. 画面上の文字を中心から放射線状に動かすこと、あるいは右から左に動かすことが、とりわけ聴覚障害者には有効である。これは、拡大提示や文字の移動を止める等することで、弱視の学習者にも対応可能となる。

3. 英語で英語を教える直接法では、教師の話す英語が学習すべき英語を示しているのか、その説明なのかを判別しにくいいため、視覚・聴覚障害を持つ学習者に対しては、説明は母語、学習内容は英語と使い分けるほうが良い。(43) これらを踏まえて、齊藤は David Crystal 著 *English as a Global Language* (Cambridge UP, 1997) をテキストに、MediaStudio Pro8 や Macromedia Flash Professional8 等に、録音ソフト Sound Engine Free や英語読み上げソフト Read Please 2003 を組み合わせてバリアフリーの自習教材を作成している。(44)

以下では、TOEIC のパート 4 の指導を想定し、Macromedia Flash Professional8 のような高価なソフトウェアを用いずとも、PowerPoint (Microsoft Office Professional Plus 2019) である程度代替できることを示す。⁷

パート 4 はリスニングパートではあるが、先読み等のリーディングの力がかなり求められる。上で齊藤が指摘した 2 点目については、「アニメーション」タブから「アニメーションの軌跡」内の「直線 (左へ)」によって、スライドに表示した文字を左から右に流すことができる。また「効果のオプション」から一文ごとにテキストを流すこともできる。流れる時間は同タブから「タイミング」の「継続時間」によって調整が可能である。「継続時間」は 2

秒がデフォルトになっているが、時間を増やせば（最大 59 秒）文字はゆっくり流れる。このあたりは学習者の状況を見ながら調整する必要があるだろう。

前後したが、1 点目と 3 点目については、2021 年 1 月 27 日に本学で行われた全学 FD「本学の ICT を活用した遠隔授業の実際と検討」の中で情報教育講座の松永豊先生も報告されたように、「スライドショー」タブ中の「スライドショーの記録」から、作成したスライドにナレーションを付加することができる。ただし、流れるスピードを落としたテキストにナレーションをつける場合不自然な英語になるため、このあたりも学習者の状況を見ながら適宜調整する必要があるだろう。

この方法はある程度限られた分量の英文の提示には有効だが、パート 7 のような長文には不向きである。特に弱視の学習者に対しては、パート 7 の場合には細切れにセンテンスを提示するのではなく、できれば 1 枚ないし 2 枚に収めた文章を拡大して読ませ、学習者が読みたいところにいつでも戻れるようマーカーで目印をつけさせる等した方が取り組みやすいと思われる。

以上、視覚障害を持つ学習者に対する情報保障について、極めて限定的な側面から検討を行った。一人一人の状態に応じた教材の確保は合理的配慮の一つである。今後、より良い環境が整備されるために教科横断的な取り組みが一層求められる。

注

- 1 「視覚に障がいのある方」

<https://www.iibc-global.org/toEIC/priority_support.html#a>（最終閲覧日 2021 年 1 月 27 日）

- 2 「【2020 年 4 月より提供開始】TOEIC(R) Program 団体特別受験制度（IP テストにオンライン方式を追加）」

<<https://www.iibc-global.org/iibc/press/2019/p139.html>>（最終閲覧日 2021 年 1 月 27 日）

- 3 「ポッドキャスト」
<<https://www.iibc-global.org/toEIC/support/englishupgrader/podcast.html>>
(最終閲覧日 2021 年 1 月 28 日)
- 4 リスニングにも問題がない訳ではない。例えば全盲の受験者はパート 1 の写真描写の問題をそもそも解答することができない。英検のようにイラストを日本語説明文に置き換える等の措置が必要であると思われる。「障がい等のある方への受験上の配慮について」<<https://www.eiken.or.jp/eiken/apply/pdf/tokubetusochi.pdf>> (最終閲覧日 2021 年 1 月 28 日)
- 5 「受験上の配慮内容」
<https://www.dnc.ac.jp/sp/albums/abm.php?f=abm00038568.pdf&n=03_hairyoannai_0421.pdf> (最終閲覧日 2021 年 1 月 28 日)
- 6 TOEIC テストの運営団体 IIBC は問題用紙への書き込みを認めていない。
<https://faq.iibc-global.org/faq/show/1056?category_id=551&site_domain=default> (最終閲覧日 2021 年 1 月 28 日)
- 7 障害保健福祉研究情報システムによる「アクセシブルなパワーポイントのガイドライン」も有益である。<https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/info/wbu_ppt_guidelines.html> (最終閲覧日 1 月 28 日)

参考文献

- 江島徹郎他. 「愛知教育大学 遠隔教育の実態把握のための調査」『大学 ICT 推進協議会 2020 年度年次大会資料』. Web. <https://online.axes.jp/program/_file/10086_062.pdf>
- 太田智加子. 「視覚障害を持つ学生に対する TOEIC 受験対策」『視覚リハビリテーション研究』. 2. 2 (2013) : 71-74. Print.
- 斉藤くるみ. 「英語教育のバリアフリー自習教材の開発」『日本社会事業大学研究紀要』. 55 (2009) : 39-57. Print.
- 「アクセシブルなパワーポイントのガイドライン」. Web.

<https://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/access/info/wbu_ppt_guidelines.html>

「受験上の配慮内容」. Web.

< https://www.dnc.ac.jp/sp/albums/abm.php?f=abm00038568.pdf&n=03_hairy_oannai_0421.pdf >

「障がい等のある方への受験上の配慮について」. Web.

<<https://www.eiken.or.jp/eiken/apply/pdf/tokubetusochi.pdf>>

「プライオリティサポートについて」. Web.

<https://www.iibc-global.org/toeic/priority_support.html>

「ポッドキャスト」. Web.

<<https://www.iibc-global.org/toeic/support/englishupgrader/podcast.html>>